

地学と切手



アイスランド「ラキの溶岩」
——ヨーロッパ自然保護
切手——

P. Q.

自然保護の概念はわが国においてここ数年のうちに急激に起こったものである。それは数100年にわたって自然に親しみ自然と調和して発展して来た日本がここ20年の無計画な開発ブームの結果として公害に対置するため叫ばれはじめたものである。それに反してヨーロッパとくにドイツでは19世紀の末頃から郷土愛護・自然保護が識者によって指摘されて来た。初期の単に失なわれて行く自然や景観植物や鳥獣を愛して保護しようとする心情一わが国での天然記念物や国立公園一から最近の機械による自然の大規模な変革殺虫剤・化学肥料・化学製品などによる自然の汚染など自然の保護は人類の生存のためという認識に達して来た。

このような背景の下に1970年をヨーロッパ自然保護年として1年間を通じて人間の生活環境の確保と公害問題も含めた総合的自然保護運動が各国同時に展開されることになり24カ国が2月にストラスブールに集まって開会式が行なわれた。これにちなんでヨーロッパ各国から各種の記念切手が発行された。たいていが動物・植物・景観であるが地学に関係するものとしてはアイスランドから8月25日発行された2種のひとつとして「ラキの溶岩」がある。

ラキの溶岩が噴出したのは1783年わが国の天明3年で浅間山大噴火とちょうど同じ年である。この噴火の様式は広域割れ目噴火といわれ時には35kmにも達する長い割れ目から多量の流動性に富んだ玄武岩の溶岩が流れ出る噴火であり噴火のもっとも基本的なものでこの島の名をとってアイスランド式噴火とも呼ばれる。インドや北アメリカで広大な溶岩台地を作

った活動もこのようなものと推定されている。この型の噴火が現世にアイスランドに多くみられるのはアイスランドが地球をとりまく地殻の割れ目の一部である大西洋中央海嶺が海面上に姿をみせた部分であろうとされる。

ラキの噴火はヘクラから約150km東で3日間にわたる激しい地震の後に6月8日に起こった。この噴火は長さ約25kmの割れ目の上の約100の火口から8カ月にわたり12.3km³の溶岩が流れ出し565km²の地域をおおった。実際にラキ(Laki)というのは25kmの割れ目のちょうど真中にあるパラゴナイト凝灰岩と角礫岩からなる比高約200mの山の名前であり割れ目の名前はラカジガール(Lakagigar)と呼ばれる。それで1783年の噴火をラキの噴火と一般に呼んでいるがそれは誤解を招くいい方でありラカジガールの噴火と呼ぶのがむしろ適当である。溶岩はSiO₂約50%のソレイイト質でありそれから5kmしか離れていない平行なEldgja-Katla-Surtseyの線がアルカリ橄欖石玄武岩を噴出しているのは対照的である。溶岩はSkafta川の深さ100~200mの谷を埋めて約100km流れ下り海岸低地に達した。海岸低地に達してデルタ状に広がった溶岩原は現在では厚くコケによっておおわれている。

この噴火による火山灰はスコットランドやノルウェーにまで達して牧場に被害を与えたがアイスランドではとくに著しく溶岩は2つの教会14の農場30の農家を破壊したが直接の人命被害はなかった。しかしより恐ろしかったのはblue hazeと呼ばれる微細な火山灰がモヤ状になって島中をおおい牧草の成長不足飢餓と病気のために牛の50%羊の79%馬の76%が失われ人口も1783年の48,884人から1786年には38,363人となった。中央大西洋海嶺の発見によりこのような噴火が再びアイスランドやそれにつづく海底に起こる可能性が強いといえる。

⑥

おもに S. THORARINSSON; 1970. The Lakagigar Eruption of 1783. Bull. Volc. tome 33-3. p.910-929. による。